

研究成果の紹介

大豆「たつまる」の狭条晩期密播による実収量の高位安定化

大豆多収品種「たつまる」の狭条栽培において、条間30cm、7月18日を播種晩限として、播種粒数40粒/m²の密播で20~30本/m²の苗立ちが確保でき、天候や圃場条件が良好であれば、実収量で300kg/10a以上が達成可能である。

内容

兵庫県の普通大豆は麦後の作付けが多いが、実収量が低い（県統計値101kg/10a：2016年）。その要因の一つとして「苗立ち」のばらつきが指摘されていることから、狭条晩期密播栽培における苗立ち確保のための最適播種粒数を検討し、実収量向上技術の確立を図った。

2017年に「たつまる」「こがねさやか」「サチユタカA1号」の多収性3品種を供試し、場内圃場において播種時期（7/6、7/18、7/28）と播種密度（10、20、30、40粒/m²、条間30cm）を組み合わせて、6.3m²（3.5m×1.8m：6条）/区の3反復で検討した。苗立ち率はいずれの品種もおおむね60~90%程度であった。品種間の耐倒伏性は「たつまる」>「サチユタカA1号」>「こがねさやか」となり、密播するほど倒伏程度（0無~5甚）が高まったが、「たつまる」は30本/m²を超える立毛本数でも倒伏が3程度にとどまった。「たつまる」は、3品種のうちいずれの播種時期でも密播条件で高収量を示した。また、7/6播種、7/18

播種の立毛本数20~30本/m²間では400kg/10a以上の多収が得られた（図）。

これらの結果をもとに、2018年に「たつまる」産地20か所で実証試験を実施したところ、著しい低収年であったにもかかわらず（県統計値64kg/10a）、獣害や初期に著しい乾燥害が生じた場所を除いた実証圃場の荷受反収（実収量相当）は224kg/10aであった。

以上より、条間30cm、7月18日を播種晩限として、播種粒数40粒/m²で密播することにより20~30本/m²の苗立ちを確保できるとともに、天候や圃場条件が良好であれば、実収量で300kg/10a以上が達成可能である。

普及上の注意事項

「たつまる」の百粒重は約20~25gでこれまでの品種よりも粒径が小さいことから、従来品種と同程度の播種量（7~8kg/10a）でも目標の播種粒数が確保できる。

牛尾 昭浩（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2410）

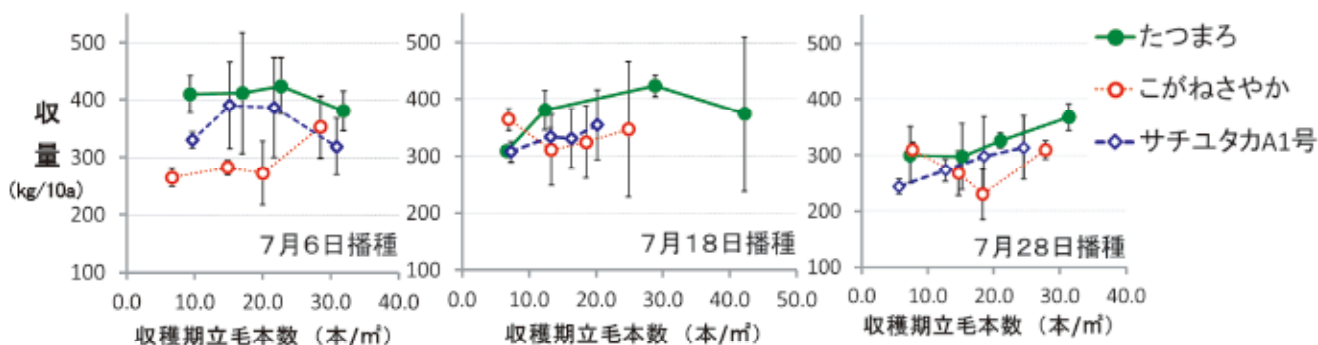


図 供試品種における播種時期別の収穫期立毛本数と収量の関係(2017年場内試験、エラーバーは標準偏差)